



Profile — 辻 敬一郎

1964年、名古屋大学大学院教育学研究科博士課程単位取得退学。名古屋大学教授・副総長、中京大学教授・心理学研究科長を歴任。元日本心理学会理事長。専門は比較心理学、実験心理学。『心理学ラボの内外』（編著、ナカニシヤ出版）、『生態学的視覚論』（共訳、サイエンス社）など著訳書多数。趣味は酒気帯び雑談。

2000年5月から11月までスイスのロザンヌ大学生物学部動物学・動物生態学教室 (Institut d'Ecologie — Zoologie et Ecologie Animale, Université de Lausanne) で過ごしました。前回の在外研究が1985年イギリスのシェフィールド大学心理学部でしたから15年ぶりです。

主任のフォゲル (Peter Vogel) さんは食虫目トガリネズミ科動物 (shrew) の研究で著名な生態学者です。5歳若い彼は以前からの友人でメールを通じ研究計画や実験デザインを相談していましたから、現地に着いてすぐ作業をはじめることができました。

心理学専攻者の「越境」に、当初は教室のスタッフや院生の皆さんに胡散臭い存在と映ったかもしれませんが、それでも快く迎えられて11月半ばまで足かけ7ヵ月間、じつに充実した毎日でした。

ロザンヌでは、食虫目トガリネズミ科動物の「キャラヴァン」と「配偶」について、近縁異種の比較分析を行いました。

行動研究では、「役者」「舞台」「演

「越境」の体験

ロザンヌ大学生態学教室滞在

名古屋大学名誉教授

辻 敬一郎 (つじ けいいちろう)

目」の3要素が重要です。役者つまり被験体について、かねてより私は有胎盤哺乳類共通の祖先である食虫目に注目していました。巨大爬虫類に替わって出現した初期の哺乳類が食虫目、なかでも現生トガリネズミ科動物は形態や脳構造が原始性をとどめていますから、哺乳類に共通する適応様式をそこに読み取ることができるかもしれません。

1970年代、勤務していた名古屋大学で、交流のあった農学部家畜育种学教室のスタッフにより食虫目の実験動物が開発されました。それが「スクス」(Suncus murinus) です。さっそくこのニュー・フェイスを登用したのでした。

つぎは演目です。配偶行動とともに適応の基本である親子関係では、「キャラヴァン」(caravanning) の存在が知られています。スクスを含むトガリネズミの種の多くに生得的に具わる行動型で、幼仔が数珠繋ぎになって親を先頭に移動するというものです。成熟前の個体の生存を保証するという適応的意義をもつと考えられます。教室の若い人たちの協力を得て、この行動の特性や発生を明らかにしました。

キャラヴァンの舞台が「オープンフィールド」(open-field:OF) です。周りを囲っただけで内部には何もないという単純な場面で、生存の援けとなるものが剥奪された非構造的な空間です。こんな不自然な場面ですから、そこで生じる行動は不毛なものだという批判が他分野から投げかけられていました。滞在先はその急先鋒、生態学の教室です。「道場破り」と思われかねません。

しかし、この舞台の有用性を主張するに足る根拠を用意していました。生息環境を模した屋外放飼場で起きるキャラヴァンは、OFに比べて限定的なものです。この事実は、自然条件下のキャラヴァンが実態 (reality)、OFという舞台で発現するのはその潜在能力 (potentiality) である、という見解です。

ロザンヌでは、この事実を引いて生態学と心理学の成果の補完性を訴えたのが受け容れられたようで、私の実験室を訪れる若い人たちが増えてきました。

こんなささやかな経験ですが、分野の境界を越えるには、あらかじめ自身の成果に基づいて、分野や研究の独自性を自覚して臨むことが大切だと思います。

越境で得たものは大学のキャンパスでの経験にとどまりません。ハチクイ (bee-eater) の営巣、カエルの産卵などなど折々フォゲル夫妻と野外観察に出かけましたが、そこで感じたことのひとつが自然誌に関する一般の人たちの知識の豊かさです。たしかにこの国の自然は「教材」の宝庫です。日本では専門レベルと思われる事柄でもスイス人には素養であるらしく、そのことはフィールドで交わされる会話からも窺えます。自然観や生命観はこのような「ナチュラリスト・レベル」に裏打ちされているのでしょうか。

3年前フォゲルさんが定年で退いた後の教室活動は生態研究から遺伝生理研究へとシフトしたと知り、複雑な気持ちです。でも自分の研究室から望んだモンブランやレマン湖はいまも鮮明に甦ります。